『就実論叢』第48号　抜刷
就実大学・就実短期大学　2019年２月28日　発行

A Connecticut Yankee in King Arthur's Court における不可思議な数、あるいは理性の敗北

The Defeat of Hank Morgan's Reason in *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*

和　栗　　了

就実論叢　第48号（2018），pp.29-42

A Connecticut Yankee in King Arthur's Court における不可思議な数、あるいは理性の敗北

The Defeat of Hank Morgan's Reason in *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*

和　栗　　了（実践英語学科）
WAGURI Ryo

キーワード：Mark Twain, *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*

序章

マーク・トウェイン（Mark Twain、本名 Samuel Langhorne Clemens, 1835年～1910年）の『アーサー王宮のコネチカット・ヤンキー』（*A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*、1889年、以下『ヤンキー』と略す）には、数字に関して最初から納得しにくいことが語られている。語り手ハンク・モーガン（Hank Morgan）は旧暦（ユリウス暦）の528年６月21日12時３分に皆既日食がイングランドで見られたことを思い出し、これを利用しようと考える。正午頃に彼が処刑されることになっていた。ところが彼の処刑が一日早められ、６月20日の昼頃に火刑が始まることとなる。ところが、ハンクが20日だと思い込んでいる日に皆既日食が起こるのだ。

この謎を解く試みはなされていない。というのは、この不可解な出来事を小姓クラレンス（Clarence）の単純な間違いとしてハンクは納得するからだ。６世紀の人々が数字に無頓着な例のひとつだとハンクは説明したいようだ。批評家もハンクのこの姿勢を受け入れ、この点に注目していない。クラレンスが意図的にハンクを窮地に追い込んでいるのではないか、ハンクに見せ場を作ってやったのではないのか、本当に裏で糸を引いているのは魔術師マーリン（Merlin）ではなく、クラレンスではないのか、という疑問も提示されていない。

数字に関して理解できないことは他にもある。513年の初期に生まれたクラレンスは528年６月半ばには15歳になっているはずだ。ところが、528年から４年後の532年には22歳になっている。19歳のはずである。また、ハンクの妻サンディ（Sandy）も年齢不詳だ。彼女は物語後半で出産しているので、再生産能力を持つ年齢だと推測できる。ハンクも年齢不詳である。彼はおそらく1850年前後に生まれたと推測される。さらに、物語の終盤でハンクの若い部下が52人登場するが、これはトランプの枚数なのだろうか。説明がない。もともと1878年

のコネチカット州ハートフォードから６世紀のアーサー王の王国に移動したという設定自体が、合理的に理解できない。この小説で使われている数とそれに関連する話は不可解なことが多い。

ハンクは支離滅裂な語り手であり、しかもこの小説はその設定から荒唐無稽なのだから、論理的あるいは数学的一貫性を求める意味はない、という主張は成り立つとしても、数字で説明するのが得意なハンクが意味不明の数字を使うことには注目すべきだ。本論では数字を手掛かりにしながら、ハンクの失敗物語が意味するものを解き明かす。

第一章　数字は無力だ！

ハンクは数字を並べ立てて自説を主張し、６世紀のアーサー王宮の国を文明化し、共和制をとり入れようとするのだが、数字による説明が６世紀の人々に受け入れられない場合がある。アーサー王とハンクが平民の姿でイングランドを巡察徒歩旅行していると、彼らは自営農家マーコ（Marco）に出会い、昼食に招かれる。ハンクは自分で必要な食材等を購入し、マーコの家で昼食会を開いてもらった、というのが正しい。ハンクは、塩２ポンド200ミルレイ（milray）から始まって、19の品物の価格を羅列する。ミルレイはハンクが鋳造した貨幣で、10000ミルレイで１ドルになるという。19品目の合計は39150ミルレイになると請求されて、ハンクは４ドル支払い、お釣りは取っておけ、と豪勢な姿を見せる。ハンクは数字で６世紀の人々を圧倒したいのである。

その上でハンクは数字を使って自説を展開する。マーコの家で鍛冶屋のダウリー（Dowley）とハンクが議論する。ハンクは、保護貿易政策よりも自由貿易政策の方が有益なことを、具体的な数字を挙げてダウリーに説明する。ダウリーの住むバッジマガス王（King Badgemagus）の国では給与は高いがそれで購入できるものは少ないと説明する。

> “Why look here, Brother Dowley, don’t you see? Your wages are merely higher than ours in *name*, not in *fact*.”
>
> “Hear him! They are the *double*—ye have confessed it yourself.”
>
> “Yes-yes, I don’t deny that at all. But that’s got nothing to do with it; the *amount* of the wages in mere coins, with meaningless names attached to them to know them by, has got nothing to do with it. The thing is, how much can you *buy* with your wages?—that’s the idea. While it is true that with you a good mechanic is allowed about three dollars and a half a year, and with us only about a dollar and seventy-five—”
>
> “There—ye’re confessing it again, ye’re confessing it again!”
>
> “Consound it, I’ve never denied it I tell you! What I say is this. With us *half* a

dollar buys more than a *dollar* buys with you—and *therefore* it stands to reason and the commonest kind of common-sense, that our wages are *higher* than yours."

He looked dazed; and said, despairingly:

"Verily, I cannot make it out. Ye've just *said* ours are the higher, and with the same breath ye take it back." (Chapter 33, 325-6)[1]

この後もハンクは一定量の塩や卵や小麦などを購入するのに、それぞれの国で何日分の労働を必要とするかを、詳しい数字を挙げて説明する。物価が相対的であり、重要なのは購買力であることをダウリーに理解させようとする。もちろんダウリーは理解しない。彼は、アーサー王国よりもバッジマガス王国の方が、給与が２倍だと主張し続けるだけだ。

この引用で、ハンクが "reason" と "common-sense" という言葉をダウリーに向かって発していることに注目せねばならない。まず､ハンクの使用する "reason" が哲学用語の「理性」に直結するとは言わないが、この引用で示されている通り、数字と "reason" は少なくともハンクの中で結びついている。理性や合理的説明が数字と結びつくことを彼は理解しているのだ。しかもそれが数字によって誰でも共有できるもの、"common-sense" で誰でも理解できることだと主張する。言葉ではなく数字という誤解のない伝達手段を使えば、理解されるはずだとハンクは信じている。

誰にでもわかること、少なくとも19世紀のアメリカ合衆国に暮らす人なら誰でもわかることを、６世紀の人々は理解しない、とハンクは頻繁に語っている。小説の冒頭、６世紀の世界に移動したハンクは６世紀の人に "right mind" を持っているか問いただす。

"Maybe I didn't hear you just right. Say it again—and say it slow. What year was it?"

"513."

"513! You don't look it! Come my boy, I am a stranger and friendless; be honest and honorable with me. Are you in your right mind?"

He said he was.

"Are these other people in their right minds?"

He said they were.

"And this isn't an asylum? I mean, it isn't a place where they cure crazy people?" (Chapter 2, 15)

ハンクの聞き方は彼の傲岸さを示すものだとしても、彼がここで "right mind" という表現を二回も使っていることは重要だ。19世紀のアメリカ社会に、"heart" と "mind" の対立があり、これが女性と男性の対立、感情と理性の対立に頻繁に関連付けられていたことを知る

読者には、ハンクの発言はひとつの論理を基にしているとわかる。“mind” を判断基準とする男性は理性的に考える、という論理だ。典型的アメリカ人を自認するハンクはこの論理を信じていると考えられる。だからこそ、どんな苦境に陥っても理性的に考え、確実に打開策を考えだせると彼は信じている。そして、彼は6世紀の人々が理性的に考えないと断定し、“it occurred to me all of a sudden that these animals didn't reason” (Chapter 5, 40) と嘆息する。ハンクに逡巡、つまり、6世紀の人々に理性は通じないのに理性的に説明せねばならないという苦闘があるとしても、彼の合理的説明はしばしば数字に立脚する。ところが、ハンクによる数字を使った説明は6世紀の人々にとって無力なのだ。

数理的な記号を使い、誰にでも理解できるものを6世紀の人々は共有していない。彼らが数理的知識を土台とする所産を共有していないことを如実に表しているのが、6世紀の人々が地図を知らないことだ。この小説で地図が最初に言及されるのは、ハンクがサンディ（Alisande la Carteloise、ハンクが Sandy と略すので Sandy とする）と初めて出会った時である。彼女はモダーの国（“the land of Moder” Chapter 11, 90）出身で、3人の魔物によって26年間も城に幽閉されている44人の姫君の救出依頼のためにアーサー王宮にやって来る。そこで、ハンクがことの詳細を彼女から聞き出す際に、サンディが地図という言葉を知らないと判明する。

> “...But come—never mind about that; let's—have you got such a thing as a map of that region about you? Now a good map—”
>
> “Is it peradventure that manner of thing which of late the unbelievers have brought from over the great seas, which, being boiled in oil, and an onion and salt added thereto, doth—”
>
> “What, a map? What are you talking about? Don't you know what a map is? There, there, never mind, don't explain, I hate explanations; they fog a thing up so that you can't tell anything about it. Run along, dear; good-day; show her the way, Clarence.” (Chapter 11, 92-3)

モダーの国がどれくらい遠いのかと問われると、彼女は、“Yes, it is many leagues” (Chapter 11, 92) と答え、数字をあげない。その国の方角も明示しない。彼女は身分証明書や照会書のたぐいも持参していない。つまり、サンディの主張することは、彼女という存在以外は一切根拠がないのだ。

ハンクが6世紀の世界で最も親密な関係を結んだ相手がサンディだとすれば、彼は彼女を数字で理解してはいない。彼女との騎士の遍歴の旅で、彼女は自分の有用性をハンクに見せつける。彼女とハンクが別の遍歴の騎士に出会うと、彼女はハンクがアーサー王国で有名な魔術師「ボス」だと相手に伝えて、その騎士を降伏させている。つまり、彼女は6世紀の上

流社会の生き方をよく知っているのだ。騎士階級の男性と性的関係を結ぶ方法もよく弁えている。だからこそ、彼女は架空の姫君救出話をもってアーサー王のもとに来たのだ。その彼女の能力と結婚戦略を理解しているからこそ[2]、ハンクは彼女の有能さと魅力を語る。それでも、ハンクがひとりごとのように "How old are you, Sandy?" (Chapter 19, 178) と漏らすとおり、ハンクは彼女を数字によって把握してはいない。物語の後半でサンディがハンクの子供ハロー・セントラル（Hello-Central）を出産しているので、彼女が再生産能力を持つと分かるし、ハンクもそれにふさわしい年齢に違いない。だが、この夫婦の年齢は不祥なのだ。まるで夫婦の関係では数字が無力だとハンクは言いたいようだ。

第二章　大事なところは数字を使うな？

ハンクのアーサー王国近代化計画は必ずしも明確な数字で説明されていない。あるいは、ハンクの語りには、具体的に数字を挙げて説明する部分と、数学的説明をほとんどしていない部分がある。例えば、アーサー王国がどれほどの広さで、人口はどれくらいか、言及されていない。アーサー王の時代には一国の大きさがコロムビア特別区くらいだという説明は納得できるとしても、ハンクはブリテン島で手足を伸ばして寝ると外国に手足が届いてしまうと言うし、"you could stand in the middle of it and throw bricks into the next kingdom" (Chapter 16, 141) と極端な誇張表現を使う。ハンクはサンドベルト（the Sand-Belt）の戦いでは25000人の騎士を殺害したと豪語する。ハンクのこうした大雑把な表現姿勢は、サンディにモダー国の地図を求めたハンクのものとは思えない。

ハンクはアーサー王の国に電信と電話を敷設し、鉄道を建設したという。石鹸工場も新聞社も設立した。ところが何マイルの電線を敷設したとか、線路は何マイルまで伸びたとか、何ポンドの石鹸を製造し、新聞の購読者数は何人だ、という説明はない。特に、物語後半でそれまで秘密裏に設置して来た学校や工場を公開するところでは、"Schools everywhere, and several colleges; a number of pretty good newspapers." (Chapter 40, 397) と主張するだけで、具体的な数字は何も挙げられていない。

詳細な数字を列挙する場合とそうでない場合の対立は、聖なる谷（the Valley of Holiness）でも明確になっている。この谷には、細い塔の上で隠者が礼拝を毎日繰り返している。ハンクは隠者の礼拝回数を測り、"I timed him with a stopwatch, and he made 1244 revolutions in 24 minutes and 46 seconds." (Chapter 22, 213) という。さらにハンクは隠者の体にゴムひもを結びつけ、ミシンの原動力として使用し、10日間で18000着の最高級下着を生産したと自慢する。しかも隠者なので、日曜日も稼働したと言う。

ところが、この聖なる谷で井戸が枯れ始め、ハンクがこれを修復する際には、ハンクは数字を使用していない。もちろん、キャメロットから呼び寄せた彼の部下が修復したのであり、単純な水漏れなので数字を使って説明するほどのことではない、との解釈も成り立つ。だが、

この井戸が石造りであると気付くと、解釈も変わる。石工はフリーメイソンを連想させるし[3]、石組みが数学を土台とすることは言うまでもないからだ。銅製のパイプや火薬や花火といった、使用する部材を細かに列挙しながらも、修復そのものは、“My boys were experts in all sorts of things, from the stoning up of a well to the constructing of a mathematical instrument. An hour before sunrise we had that leak mended in a ship-shape fashion, and the water began to rise.” (Chapter 23, 218) と簡単に説明する。これは、ハンクがフリーメイソンを連想させるある種の数字が苦手だったことを示す可能性もあるが、ハンクが意図的に数字を使わなかったと解釈する方がよい。というのも、この場面では、周囲250エーカーにいる人々が花火を見れるように工夫するとか、11時25分ちょうどに花火大会を始めるというように、具体的な数字を頻繁に使用しているからだ。つまり、ハンクは数字を細かく列挙する場合とそうでない場合の対照を示したいのである。

ハンクは本当は数字に弱いのかもしれないと気付くと、彼の数字使用を再検討する必要も生ずる。というは、彼は数字で騙されているからだ。先に論じたように、ハンクは自営農民マーコの家の食事会で食材等を購入し、饗応する。その際、店員は19品目の合計が39150ミルレイだと言うが、テキストに列挙されている品目の合計は、38100ミルレイである。店員の請求書は以下のとおりだ。

2 pounds salt	200
8 dozen pints beer, in the wood	800
3 bushels wheat	2,700
2 pounds fish	100
3 hens	400
1 goose	400
3 dozen eggs	150
1 roast of beef	450
1 〃 〃 mutton	400
1 ham	800
1 sucking pig	500
2 crockery dinner sets	6,000
2 men’s suits and underwear	2,800
1 stuff and 1 linsey-woolsey gown and underwear	1,600
8 wooden goblets	800
Various table furniture	10,000
1 deal table	3,000
8 stools	4,000

2 miller-guns, loaded..... 3,000

(Chapter 32, 318)

明らかに1050ミルレイ水増し請求されている。しかもハンクは40000ミルレイ（４ドル）を払って、釣銭をチップとしてこの店員に与えた。つまりこの店員は水増し分を合わせて1900ミルレイをだまし取ったのだ。バッジマガス王国では、一般労働者の日給が25ミルレイ、職人の日給が50ミルレイだと語られていることを知ると、1900ミルレイが職人の日給で38日間の給与に相当する、かなりの高額だと分かる。ハンクは高額の金をだまし取られたのだ。

クラレンスも同じように数字を使ってハンクをだましていると考えられる。クラレンスは皆既日食が起こる21日当日に、今日は６月20日だとハンクに知らせた。これで一度だました。その後クラレンスは、ハンクが強力な魔術師なので、その力が最高点に達する21日より前に処刑を行うようにアーサー王に進言したとされる。おそらくクラレンスはハンクをここでもう一度だました。なぜなら、進言したことを示す証拠はクラレンスの次のような発言しかないからだ。

> Tis through *me* the change was wrought! And main hard have I worked to do it, too. But when I revealed to them the calamity in store, and saw how mighty was the terror it did engender, then saw I also that this was the time to strike! Wherefore I diligently pretended, unto this and that and the other one, that your power against the sun could not reach its full until the morrow; and so if any would save the sun and the world, you must be slain to-day, whilst your enchantments are but in the weaving, and lack potency. Odsbodikins it was but a dull lie, a most indifferent invention, but you should have seen them seize it and swallow it, in the frenzy of their fright, as it were salvation sent from heaven; and all the while was I laughing in my sleeve the one moment, to see them so cheaply deceived, and glorifying God the next, that He was content to let the meanest of His creatures be His instrument to the saving of thy life. Ah, how happy has the matter sped! You will not need to do the sun a *real* hurt—ah, forget not that, on your soul forget it not! Only make a little darkness—only the littlest little darkness, mind, and cease with that. It will be sufficient. They will see that I spoke falsely,—being ignorant, as they will fancy—and with the falling of the first shadow of that darkness you shall see them go mad with fear; and they will set you free and make you great! Go to thy triumph, now! but remember—ah, good friend, I implore thee remember my supplication, and do the blessed sun no hurt. For *my* sake, thy true friend."（Chapter 6, 45-６）

21日なのに20日だとだましたのもクラレンスであり、処刑日を一日早めるよう進言したのもクラレンスだとすれば、528年６月21日12時３分にブリテン島で皆既日食が起こったことをハンクに思い出させたのもクラレンスだったのではないかと勘繰りたくなる。少なくとも皆既日食に関して、黒幕はクラレンスだ。

サンディも数字に関してハンクを騙している可能性がある。先に述べたとおり、彼女は年齢不詳だ。44人の姫君と一緒に26年間幽閉されていたとすれば、彼女の年齢は少なくとも30歳代だと推測される。40歳代の可能性もある。だが、彼女は自分の年齢を隠し続けた。さらに、サンディがクラレンスによってある程度操られているとすれば、彼女もハンクをだましていると推測される。クラレンスの不気味な存在はハンクがサンディと初めて出会い、尋問した場面の挿絵に次のように描かれている[4]。

"GREAT SCOTT, CAN'T YOU UNDERSTAND A LITTLE THING LIKE THAT?"

ここでもクラレンスは背後に居ながら、前景のサンディとハンクの姿を観察しているように見える。アーサー王がハンクにサンディとの騎士の遍歴に出るよう命じた、という知らせを持ってきたのはクラレンスである。彼はその喜びとハンクへの嫉妬を抑えきれないほどだったとハンクに告げる。喜びと嫉妬を表現することでクラレンスは騎士の遍歴に出ることをハンクに納得させたのである。クラレンスがハンクの活動の背後で、心理的に操作していると推定する読者には、ハンクを指名するようアーサー王に進言したのはクラレンスに違いないと推測できる。

クラレンスは物語の最初から最後までハンクを操っていた。新聞や鉄道などの近代文明を具体的に監督していたのはクラレンスである以上、そのすべてを短期間で消滅させることができたのはクラレンスだけである。ハンクが息子ハロー・セントラルの気管支炎の治療のためにフランスの海岸地帯で療養していると、すべての軍艦が姿を消し、大西洋横断貿易船も消滅する。これらのことを最も効率よく実行できる人物はクラレンスだけだ。

クラレンスが実は女性であり、ハンクの愛人だったとすれば、クラレンスがハンクの導入した近代文明を根本的に破壊せしめた理由がわかる。それはクラレンスの嫉妬だ。ハンクはフランス滞在中にサンディと結婚し、サンディを賞賛し、崇拝する。ハンクは自分達の結婚が “the dearest and perfectest comradeship that ever was” (Chapter 41, 407) だとのろけるが、クラレンスにはハンクの裏切りと思われたことだろう。たとえ教会による聖務禁止命

令が一因だったとしても、19世紀の文明の消滅がハンクとサンディの結婚と時期が重なるのは、偶然の一致や陰謀ではなく、クラレンス嫉妬が背景にあるのだ。

『ヤンキー』は最初から男女の不倫関係を念頭において書かれている。マーク・トウェイン は "Preface" で、"the author of this book encountered the Pompadour, and Lady Castlemaine, and some other executive heads of that kind" (xxi) と嘆いている。フランス王ルイ15世(Louis XV)の愛人ポンパドール夫人と、イングランド王チャールズ２世(Charles II) の愛人、初代クリーヴランド侯爵夫人の名前がトウェインの「まえがき」に登場する[5]。この小説の最初からアーサー王の王妃ギネヴィア (Queen Guenever) がラーンスロット卿と恋仲だと語られ、アーサー王国の消滅はアーサー王がこの二人の不倫関係を知ったことだと語られる。だとすれば、ハンクとクラレンスとサンディの三角関係を疑うことができる。なぜなら、クラレンスは有名な女優サラ･ベルナール (Sarah Bernhardt、1844年～1923年) をモデルに次のように描かれているのだから[6]。

"GO 'LONG," I SAID, "YOU AIN'T MORE THAN A PARAGRAPH."

小姓あるいは騎士見習い (page) と呼ばれる者が通例男性に限られるとしても、トウェインの作品中に男性同性愛は指摘できる[7]。『ハックルベリー・フィンの冒険』のハックとジム、ハックとサイラス・フェルプス、それぞれの間に同性愛関係の可能性はある。さらに、ハンクが選んで訓練した52人の精鋭部隊も、クラレンスのように女性に見える[8]。クラレンスを含めた、53人の美しい部下達とハンクがマーリンの洞窟 (the Merlin's Cave) にこもってイギリスの騎士達と闘うことになる。

クラレンスの性が重要なのではなく､ハンクとクラレンスとサンディが親密な関係にあり、物語の最終盤、第41章でハンクとサンディが結婚することが重大なのだ。クラレンスとしては、ハンクを最もよく理解し支援してきたのは、自分だという自負があって当然だ。そのために数字を使ってハンクを騙すようなこともした。６世紀の世界でハンクの活躍の場を演出し続けてきたのはクラレンスだ。ところが、ハンクはサンディとの間に子供が生まれると、サンディと結婚し、自分はニューイングランド人で道徳的だと主張する。そして、新婚旅行のようにフランスに旅発つ。嫉妬にかられたクラレンスは、ハンクが造り上げたものすべてを消し去り、教会に聖務禁止命令を出させ、ハンクとイギリス全土を対立させることでハンクを取り戻そうとしたのである。その結果、物語の最後のサンドベルトの戦いではサンディは登場せず、ハンクはクラレンスとともにいる。クラレンスの勝利である。もちろん、19世紀に戻ったハンクが瀕死のせん妄状態の中でサンディを恋い慕っていることをクラレンスは知らないとしても、ハンクを操作し続けたのはクラレンスだ。

『ヤンキー』は男女の三角関係を描いていた｡トウェインによるポンパドール夫人やレディ･

カースルメインへの言及に始まり、アーサー王とギネヴィア王妃とラーンスロット卿の三角関係、そしてハンクとクラレンスの関係にサンディが入り込んできた。こうした、男女の三角関係を表現する数字はない。同時にそうした三角関係を覆い隠すかのように数字や理性的判断が羅列されている。ここに数字をめぐる対照があり、ハンクは自身の三角関係を表現しないのだ。

第三章　理性の敗北

ハンクは天文からの影響を受けたいと望んでいた。皆既日食が始まる日の午前中に、自らの中の “mercury” が最高度に上昇したと告白する。

> But it is a blessed provision of nature that at times like these, as soon as a man's mercury has got down to a certain point there comes a revulsion, and he rallies. Hope springs up, and cheerfulness along with it, and then he is in good shape to do something for himself, if anything can be done. When my rally came, it came with a bound. I said to myself that my eclipse would be sure to save me, and make me the greatest man in the kingdom besides; and straightway my mercury went up to the top of the tube, and my solicitudes all vanished. I was as happy a man as there was in the world. (Chapter 6, 44-45)

“mercury” は「水銀柱」を意味するだけでなく、「水星」やローマ神話の「メルクリウス」をも意味する。そしてメルクリウスが神々の使いで、商業、盗賊、雄弁、科学を司るとすれば、ハンクは6世紀のアーサー王国のメルクリウスだ。彼は商業を起こし、盗賊のように搾取し、高飛車なまでに雄弁であり、科学を導入しようとした。この小説で6回使われている “influence” という語も含めて考えると、ハンクは天体の影響を受けながら6世紀の世界を文明化しようと試みたと言える。

確かに『ヤンキー』は天文と深く結びついている。トウェインが天文学に興味を持ち始めたのは、1835年にハレー彗星の接近があったからだと言われている。トウェインが生まれた年にハレー彗星の接近があったので本人がそう主張している。この説は疑わしいとしても、ハンクの語りが天文学と密接に結びついていることは明らかだ。旧暦の528年6月21日にイングランドで皆既日食が見られたという主張そのものが、事実かどうか別として、ハンクの膨大な天文学的知識を示している。さらに、サンディの衣装に星があり、これも天文学を想起させる。サンディの衣装の星がアメリカ合衆国旗を連想させる可能性もあるが、なによりもまず、天文学を想起させる。彼女の服には五芒星も六芒星も七芒星もあり、一貫性がないとしても、彼女は星のついた衣装を最後まで着ている。

これに対し、この小説では太陽も星も見えない漆黒の闇の中で人々が極めて残虐な姿を露呈する。アーサー王とハンクが平民の姿で巡察旅行に出ると、領民の暴動とそれに対する領主側の報復の惨劇を目撃する。暗闇の中で、稲光に映し出された木には何人もの人間が木に吊るされていた。そこでは、"solid darkness—darkness" (Ch. 30, 293) と暗黒が強調されている。さらにアーサー王とハンクの二人が奴隷として売られ、ロンドンに向かう途上、夜の吹雪の中で、魔女の嫌疑を受けた生きた女性を火あぶりにする光景に出会う。奴隷達は火刑の火で暖をとる。夜の吹雪は視界を閉ざし、"we were shut up as in a fog, the driving snow was so sick" (Ch. 35, 353) となる。星も太陽も見えない暗黒の世界の中で、人々は立場の弱い人を殺戮し、火刑にする。天体が見えない暗闇の中で、人々が残虐になることをハンクは知るのだ。そしてこの論理に立てば、皆既日食の最中にハンクは火刑にされる可能性があった。事実、日食の開始時にマーリンはハンクの足元の薪に火を着けようとする。ところが、太陽は欠けていても、まだ見えていたのだ。ハンクはかろうじて太陽によって守られていたことになる。

ハンクが天体と何らかの関係を持っているとしても、彼はそれを理解できない。ハンクにとって、皆既日食は、曜日と時間という数字で理解できるものだったが、クラレンスが介入し、それを不可解なものにしている。星をちりばめた衣装をずっと身に着けているサンディも、ハンクには理解しにくい人物だった。彼女は6世紀の上流階級の慣習を理解しているが、"How old are you, Sandy?"（前出）と年齢を問われると、思考が停止する人物だ。象徴的な読み方をすれば、彼女は数字をもとに理解されることを拒否している。十数頭の豚を44人の囚われの姫君達だと主張するサンディを見て、ハンクが "I was ashamed of her, ashamed of the human race" (Chapter 20, 186) と強烈な表現を使っていることから、両者の間に深い理解があったとは考えにくい。

一方に天体の影響下にある世界があり、他方に漆黒の闇の、残虐な世界がある中で、ハンクは苦悩する。天体の影響下の世界が何らかの法に支配される世界であっても、それを理解するための正確な数字、一貫した理性をハンクは与えられていない。天体に導かれる世界が理性によって支配される、平和で幸福な世界だとは限らない。ハンクにはその世界にいたるひとつの手段かもしれない数字が整っていないのだから。何より、その世界にハンクは到達していないのであり、それが望ましい世界かどうか不明である。ただ、6世紀の人々も19世紀の人々も動物であり、人間ではないと苦悩するだけだ。

ハンクが天体の影響下にある世界を6世紀に造れなかった最大の理由は、6世紀の人々、特にクラレンスとサンディを理解していなかったからである。そしてどちらの人物の理解にも、数字が信頼できなかった。19世紀人としてのハンクの傲慢さが失敗の原因である。同時に彼は6世紀の世界に数字で戦いを挑みながら、数字で敗北したと言える。

理性と言われるものが数字や天文学や物理学に端を発していることは疑いない。ハンクが数字を使いながら説明することは、理性的で合理的な語りだったはずである。ハンクは人間

が “reason” や “right mind” を持つことを前提とし、それに訴えかける手段として具体的な数字を用いたのだ。ところが、彼には正確な数字が与えられないし、彼自身の数字の利用も恣意的で信用できない。ハンクは25000人の騎士達を殺害したと主張しても、その根拠となる人口さえも明示されていない。自分こそ最大の殺人者だと主張しても、彼の使う数字に信頼性はない。もちろん、1300年の時間を遡行したという彼の主張も信頼できない。

ハンクを敗北させたものは二つある。ひとつは６世紀の人々が数字や数学的なものを重要視していなかったことである。もちろんその根底には、ハンクとクラレンスとサンディの三角関係があった。そしてその三角関係は決して明確には表現されないことだった。もうひとつは、ハンク自身が数字を必ずしも信頼していなかったことである。つまり、ハンク自身が数字と理性によって天体につながっていなかったのである。この二点でハンク・モーガンの理性は敗北したのだ。

引用参考文献

Primary Sources

Samuel Langhorne Clemens (Mark Twain). *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*. California: University of California Press, 1979.

---------. *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*. The Works of Mark Twain. Ed. Bernard L. Stein. California: University of California Press, 1979.

---------. *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*. Allison R. Ensor ed. New York: W. W. Norton, 1982.

---------. *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*. Henry B. Wonham ed. New York: W. W. Norton, 2018.

---------. *Autobiography of Mark Twain, Volume 3*. Griffin, Benjamin, and Harriet Elinor Smith, eds. California: University of California Press, 2015.

Secondary Source

和栗　了、「結婚と金：*A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* におけるサンディの戦略」『京都光華女子大学研究紀要』（第45号，2008年），39-55。

[1] テキストには、Samuel Langhorne Clemens (Mark Twain), *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* (California: University of California Press, 1979) を用いた。注釈も含め、

本文中のこのテキストからの引用は、括弧内に章番号とページ番号を記す。なお、初版で使用された挿絵は、従来から著者の意図を十分反映するものとしてテキストの一部と見なされているので、この版に収録された挿絵をテキストの一部として引用する。

[2] 拙論「結婚と金：*A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* におけるサンディの戦略」『京都光華女子大学研究紀要』（第45号，2008年），39-55 参照。

[3] トウェインは1860年12月から1869年10月まで、フリーメイソンの会員だった。彼がフリーメイソンと関係を断った理由は分からない。*Mark Twain's Letters, Volume 1: 1853-1866* (California: University of California Press, 1987), 106-107 参照。

[4] 図は、第11章91ページから引用。なお、以下の第12章102ページの挿絵（下左図）のサンディの服は下半身にも星印があるが、91ページの挿絵には下半身に星印がない。第41章408ページの挿絵（下右図）にも星印がある。

"SHE CONTINUED TO FETCH AND POUR UNTIL I WAS WELL SOAKED."

"HELLO-CENTRAL!"

[5]『ヤンキー』の校訂段階で、トウェインは第35章から７つ強のパラグラフの文章を削除した。その中に、チャールズ２世の愛人達に関する "NELL GWYNNE, Lady CASTLEMAINE, LOUISE, QUEROUAILLE, By the Grace of God Rulers of England, Anointed Heads of the English Nation, Mothers the English Nobility." ("EMENDATIONS OF THE COPY-TEXT," *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*, The Works of Mark Twain, Bernard L. Stein ed., California: University of California Press, 1979, 680) という一文があり、トウェインは『ヤンキー』の第35章でチャールズ２世をめぐる愛人達の確執に言及したかったと考えられる。

[6] テキスト、第２章18ページより引用。

[7] 自伝でも男性同性愛の可能性を持つ短編 “Wapping Alice” が収録されている。*Autobiography of Mark Twain, Volume 3* (Griffin, Benjamin, and Harriet Elinor Smith, eds., California: University of California Press, 2015), 24–42参照。なお、この挿話は生前未出版であった。

[8] 52名の部下の一人が、テキスト、第43章425ページで、以下のように挿絵に描かれ、この挿絵からその男性的特徴も女性的特徴も指摘できる。